

やり直しのできる社会を！

# 新宿連絡会NEWS

2015.2.22  
VOL. 66

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議  
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10  
関ビル106号 NPO新宿気付  
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895  
<http://www.tokyohomeless.com>

## 夜にしか会えない

笠井和明

2014年から2015年の新宿の冬は、いつもより静かに、そして、いつもより深く、その終焉を迎えつつある。

目立たぬことは路上の仲間にとっては良いことであり、これからの人生をじっくりと考える時間だけはたっぷりであった。

社会が考える「ホームレス」、行政が考える「ホームレス」、支援者が考える「ホームレス」は、当事者の考える「ホームレス」とはまったく別の存在なのだ、よくよく考えてみると気付かされたりもする。

外部の人々は何かに当てはめようとする。それが、上から目線であろうが、下から目線であろうが、何らかの価値観を規準をもとに彼、彼女らを「規定」したがる。かく云う私も「規定」し続けて来た張本人なのであろうが、一度そう云うものをきれいさっぱりと脱ぎ去り、もう一度、「規定」するのではなく）見つめ直してみたいと思ったのが、今年の冬で

もあった。

支援者はある種の同情を社会に強いる。そのことで自らの活動の正当性を見いだしたいと思うからである。もちろん、一般論としては有りうる考えであり、ある種の同情からしか社会が動こうとしないのも、お涙頂戴的なマスコミの報道もしかり、よくある話である。しかし、そこには社会を変えると云う価値観があり、(どのように変えようとしているのかは、てんでバラバラでもあるが) その手段として同情論を利用しているとも言える。

しかし、当の彼、彼女らは同情を欲しているのだろうか？「同情よりも金をくれ」、かつて流行ったドラマのキャッチにあるよう、実は生きるプライドを持ち、同情だけは拒否している人々がなんと多いか。

先日、とある公園から、とある場所に移転し、そこから普通の生活に戻ろうと、所謂「生活支援」を任されたおっちゃんがいる。しかし、そのおっちゃんは、住所移転まで済ませたと云うのに、「疑われている」「信用されていない」との理由で、すべてを放りなげ、路上に戻って行った。生活支援とやらが、少しおせっかい過ぎ、また少し形式過ぎたのであろう。それまで問題なく順応して来た仲間の突然の変異に我々は驚くばかりである。

また、この越年期に「保護」し、年明けにとある施設に行ったおっちゃんは、それから間もなく施設の職員への「不快感」を感じて、黙って出てしまった。聞けばその職員、づけづけと物事を言うタイプの方（江戸っ子タイプ？）のようで、どこの業界でも良くいる慣れ慣れしい方なのであろう、そう云う悪意がない（？）人の言葉が、対象者であったおっ





ちゃんの何がしらかの琴線に触れ、こう云う結果になったと思われる。前もって分かっていたら、それなりの対応が出来るのであろうが、分かった時はもう決裂と云うケースは、人間関係では良くある話しである。

単に「プライド」や「自尊心」と云う言葉では、あまりにも単純化したものになってしまうが、それすら人それぞれで良く分からないし、一般化するようなものでもなからう。

かつて私たちが言って来たような「背中をちょっと押す支援」と云うのは、強く押そうとすると抱きついてしまったり、軽くと思ったら、その圧力が当人には感じられないものであったりと、相手がいてこそそのものであり、相手が何を考えているのか、何を求めているのか、そこに立ってられるのか、それともふらついてしまうのか、ふらつくとしたら右に傾くのか、左に傾くのか、前に傾くのか、後ろに傾くのか、それとも斜めか？と、云うきわめて繊細なものであったりもする。

「生き方」の問題と云うのは、実にやっかいで、制度や治療ではどうにもならないものがあり、かと言って、強いるものでもない。迷いながら生きていくのもまた人生。その意味では、福祉であるとか、自立であるとか、制度であるとかは、人を殺す力など本来はもっていないと思うのである。

しかし、世間一般や善良な支援者は、路上で暮らす彼、彼女らを同情をする。そして、彼、彼女らのために「何かをしたい」と考える。「ISIL」を他国の宗教戦争であるから放っておけと云う論者と、世界平和のためかかわるべきだと云う論者がいるよう、「目に見える」問題に対しては色々な意見がある。そして、社会とはどのように有るべきか、都市とはどのように有るべきかと云う、一つの価値観がそこに加わる。あくまでそれは他者の論理であるが、自らも社会の一員でいる以上、そうではないのだと

言い張ることも出来る。けれどもそんなことを言っている間に、当事者と云うのは、その社会の価値観からどんどんと乖離していく。

昭和恐慌時に浅草で「目に見え」、当時のマスコミや学者がそれを「発見」し、大きな社会問題にしてしまった、所謂「ルンペン」の問題は、どのような収束を見せたのだろうか？また、戦後、上野駅を中心に社会問題化した「浮浪者、浮浪児」の問題はどのような収束を見せたのであろうか？かつて、そのようなことに問題意識を持ち、(ネットが普及していない時代なので)図書館に通いつめた時があったが、始まりと云うのは分かるが、終わりと云うものはあまねく良く分からないものであった。明治期の「貧民窟」の問題もそうで、また、「山窩」の問題もまた同じで、そこに暮らしていた人々がどのような人生を全うしたのかが分かる文献はもちろんあまりなかったし、政策的な総括と云うものも少なかった。結論的になんとなく言えたのは、「事の本質は何ひとつ解決されず、ただ時代の波(満蒙開拓であったり、戦時体制であったり、朝鮮特需であったり)に流され、埋没していっただけ」である。

まあ、同情と云うのは長くは続かないものでもある。

新宿に居ると、20数年前、山谷で共に働いていた仲間や、新宿で一緒に野宿していた仲間などに出会うことがある。それは、その時代を共有したものしか分からない関係である。男同士の友情と云えばそれまでであるが、そう云う再会の数々がどこか懐かしかったり、頼もしかったりもする。まあ、今でも生きてると云うことは、当時は30代、40代、第一線で活躍していたバリバリの労働者であり、年齢層も私に重なり、まさに同時代を生きて、働き続けてきた同士でもあったりもする。もちろん、彼らは同情などは欲していない。

かつて、「派遣村」の前後だろうか、どこかのおせっかいおばちゃん連中が私たちの炊出しを取り囲み、自分達の政治的価値観で善意(生活保護)を売り込もうとしていた時、多くの当事者が直感的に違和感を感じ、私たちがそれらを実力で「排除」した時、「よくぞやった」と評価したよう、同情に何にしる、彼、彼女らは他者の視線を敏感に感じとる。利用されてきた歴史をもつ人々は、実に臆病でもあるし、また繊細に物事を判断する。

福祉関連の施策はどれも「サービス」であり、一部を除き、そのほとんどは「契約」である。厳密に云えば「可哀想」だからといって「保護」する訳で

はない。あまりに同情を押し付けようとする人は行政担当者にはあわないし、またNPOの職員にもあわない。それじゃ、あまりにも機械的じゃないかとの社会の批判に対し、確かに厳密さはあったとしても、これらの制度にも「多少の余白」はありますよ。と答えるのが普通である（実際、そのような余白は多くある）。社会の同情論をベースに生活保護をどんどん受給させた結果は、ここで言うまでもないが、私の言葉で言えば「事を隠べいしただけ」となる。

あまりに「契約」であることを言うと、「そんな難しい判断が出来る訳がない」との答えが返ってくるが、難しくしているのは我々の側で、優しく説明すれば良いだけの話なのである。多くの人々は、多くのアドバイスをもらいながら、「判断」は常にしているものであるが、「人の生活力」を信じていないと云うか、強制しようとしていると云うか、とにかく勝手に他人と自分の生活を比較し、同情したり、排除したりして自己満足感を得ようとする社会と云うものは、難しい。そして、その同情やら迷惑やらがもたらした「問題」と云うものは、目に見えなくなると自然に忘れられてしまう。まあ、これは今も昔も変わらぬことである。

その目に見えないものも含めて、こだわり、どうかしようと考える人々は、「趣味人」以外は、その地域に根付き、下層の人々の生き方とか、都市の在り方とか、福祉の在り方とか、特別の問題意識を持ちながら生きている人々ぐらいなものである。そして、それらの人々は、そこに暮らす人々を「生活困窮者」「貧困者」などと、人の生き方すら卑下し、最大公約化しようとする馬鹿げた「一般論」では決して呼ばない。現に目の前に居る、彼、彼女らの存在を、心底尊重しているが故に。

いつものよう、前置きがだらだらと長くなってしまったが、「終わりの冬」が「終わらぬ冬」になって、次にどこに向かうのか？未だ良く分からぬ冬であるが、それでもまあ、誰に何と言われようとも、私たちは、私たちがかかわってしまった下層の人々の諸課題に今も付合わされることとなっている。まあ、私たちなどは、単なる趣味人なのかも知れないが、それにしても長くやっていれば、おっちゃん達に自然と頼られる。頼られたら無下にも出来ない。その繰り返しの様な気にもなる。

あえて、自らが参画しながら、見えなくして来た新宿の「ホームレス」を、より自然体で俯瞰してみようと考えたのが、ZEROと名付けた今期の越年でもあった。しかしながら、その試みは、楽しかった

反面、その現実に押し潰されそうになる位、自ら「問題化」した問題の根深さを今更ながら実感させられるものであった。

何なんだよ、この新宿と云う街は。

パトロール班の記録にもあるが、夕方からの新宿区内で平均202名が、終電が終わると、その周辺まで含めると287名にまで膨れ上がる。そして、昼間になれば、都の概数調査（26年8月）では102名となる。新宿区では公園テント問題はほぼ収束し、その周辺部の雑業グループが固定、半固定層となり、未だ野宿生活を続けているが、その倍以上の仲間が昼間どこかに居て、そして夜、人知れず路上に横たわる。

炊出しの実数と云うのは、そこに集まる層が野宿層のみならず、生保層も加わり、また利益供与的な部分が強い（ただ飯なので）から、実際に困ってなくても人々は集まる。それを現に居所に困窮している（つまりは、安定して寝る場所がない、帰る場所がない）野宿者の実数とかぶせるのは、少し無理がある。新宿駅などは、確かに終電を逃した者が、駅で一晩なんて云う現象もなくはないが、さすがに冬の夜は、それは少ないので、路上で寝ている人々は何らかの事情があるのが普通であろう。

実は越年前にお忍びで深夜帯に駅に車をつけ、まわって見たことがあったが、その時うづくまるようにしていた若者は、「僕は明日になればお金が入るので」と、毛布はもらわず、ホカロンだけ「ありがとう」と受け取った。しかし、その若者が、越年期に行ってみると、同じところでうづくまっていた。「お金はどうしたの？」と聞けば「うまくいかなかった」と答える。そして、また「明日になれば」と、あまり現実味のない話を滔々とする。まあ、本人が支援が必要だと言えば、ホームレス支援の対象者になるのであろうが、儂い希望だけを頼りに、毎晩



凍るような新宿駅でうずくまる姿は、同情やおせっかいはしたくないが、それでも、どこか心を打たれる。そんな、何もかも判別しがたい街なのであるが、それでも、私たちの規準は、「そこに居る」からである。

仕事をして来た仲間や、仕事を探しに来た仲間にも、深夜多く出会った。まったく間抜けな話であるが、「手配師がいると思って来たけど、考えてみれば年末に居る訳ないよね」。そりゃそうであるが、来てしまったからには、どうにかせにゃあかん。何もないし、金もないので、NPOの臨時宿泊に泊め、年明けに仕事に行ってもらった。

70数歳まで建築系で働き、アパートで暮らし、年齢のせいもあり、年末都内のアパートを引き払った仲間もいた。彼は若い頃から働き、働き続け、バブル崩壊後の時代も何とか凌ぎ、そして、まだまだ働こうとして来たが、流石に自分の年齢にだけは勝てず、自分の「城」を放棄せざるを得なかった。彼も野宿が慣れていないので、宿泊させ、年明け、福祉へとつながったが、その後も時たま事務所に遊びに来て「なんか仕事ないかね」とあっけらかんと言う。

17年前の西口地下広場火災の時、被災をして、「なぎさ寮」に入ったと云う仲間とも再会した。病気がかなり進行していて、その後、全国のあちこちの福祉を渡り歩き、そして、新宿の地に戻って来た。こちらは何となくしか顔を覚えていないのであるが、あちらは鮮明に覚えているようだ。17年も前なのに、その頃の話しを何だかんだと話し続ける。やたらとあの頃を思い出させないでくれと、内心叫びたくもなる。「なぎさ寮」はもうないのよと、説得し、医師同行で宿泊させ、年明け福祉につないだ(後日談はいろいろあるが)。

彼らが新宿に来るのは、炊き出しがあるからではなく、テント村があるからではなく、また、仲間が大勢いるからでもない。「そこに新宿が有る」からなのだろう。

私たちが来る21年前よりずっと前から、新宿はこう云う街であった。1980年の西口バス放火事件も、そんなに古い話ではない。闇市の話も、愚連隊の話も、ドラム缶に焚き火の話も、そう云えば昔からよく聞いていた。見えなかった問題、見えなかった歴史が、この街の路上には記憶されている。下層の話しなら尚更である。

それを考えると、バブル崩壊から今日までの私たちが経験し、とても長いと思っていた期間は、新宿

の地においては特殊な歴史の一瞬であったのかも知れない。目に見えなくなると、社会の側からする問題化の声は、次第に小さくなり忘れ去られていく。けれど、それは単に元に戻った(もしくは戻りつつある)だけなのではないだろうか? そんな疑問が湧いては消えていく。ならば、問題を目にしてしまった私たちが消えていくのは簡単であるけれども、目に見えなくなったら投げ出してしまうような事があって良いのであろうか? そんな薄っぺらな同情だけで、私たちはこの仕事をやり続けてきたのであろうか?

「いったい君たちは何を見てきたのか?」「君たちは何を見て、何を感じてきたのか?」と、天の声(地の声?)が、寒い路上を歩いていると、聞こえてくるのである。

まあ、越年期の定義は、時代と共に変わるのであろうし、変えていかねばならないと思うのであるが、それを実感できる程度の経験はさせてもらった。

そして、だいたいの方向は間違っていないであろうとの確信も得た。

システムも多少の不備はあったとしても、改善点は数多く見つかった。ここではそれをいちいち述べないが、見つかっただけでも成果である。

これを私たちだけで通年的なものとして確立させるには相当の困難性が伴うが、私たちだけでも期間限定でこの程度のことは出来るのであるから、通年的な都市機能として確立させるのは、そう難しいことではないかも知れない。それは、対策上の「現実可能な希望」でもある。何か特別なことをやった訳ではなく、私たちがやったことは、ただ、終電が終わった後に、新宿の街を専門家(趣味人?)が徘徊し、情報を提供し、信頼関係を作り、必要とあれば宿泊場所に移送し、医療対応、相談対応の後、それぞれの状況に見合った既存の施策に結びつけただけのことである。こんなことは東京都が本気を出せば、すぐに出来ることであろう。

まあ、目に見える問題だけに執着し、そこに隠されている部分を見失っていると、東京オリンピックが終わると同時に、問題が再燃してしまうなんてこともあるかも知れない。さすれば、それこそイタチごっこであり、懸命に働いて来た人々に路上生活を再び強いる、何度でも何度でも強いる「報われない都市」の末路を迎えるだけである。

それでも、ここ新宿では仲間は、どうかこうにか「希望」を何かに託し、生き続けるのであろうが・・・。

(了)

# 2014-15 新宿連絡会越年期集中活動・医療班報告書

今回の越年期集中活動は、昨年までの中央公園に医療テントを設営し、24時間医療スタッフが常駐する活動から変更し、連日夕方と深夜に新宿連絡会のパトロール活動に同行して野宿者の生活場所に訪問し、健康状態を聞き取り、血圧計測・市販薬提供を行った。また体調を崩し、野宿生活が困難と判断された人は連絡会のシェルターに保護し、越年明けまで健康状態を見守った。また、福祉事務所が開く1月5日に生活保護申請に同行した。12月31日はパトロールを行わず、中央公園で年越しイベントが開催されたため、医療班もイベント会場で机出し健康相談を行った。

## 活動期間

：2014年12月28日から2015年1月5日まで9日間

## 活動場所

：新宿中央公園・西新宿・新宿駅周辺、高田馬場  
(12月28日-1月5日)

## 活動内容

- ：パトロールに同行し訪問健康相談
- ：夕方 東口ルート・西口ルート(17:00-19:30)
- ：深夜 西口地下ロータリー (20:30-23:30)
- ：高田馬場の連絡会シェルター保護者健康相談  
(20:00-22:00)
- ：年越しイベント開催中机出し健康相談  
(12/31中央公園水の広場、17:00-20:00)
- ：生保申請手続き同行 (1/5 新宿福祉事務所)

## 医療班参加ボランティア 30名

：医師12、歯科医師1、看護職9、薬剤師2、一般2、学生4

## <パトロール12/31以外>

	東口ルート	西口ルート	深夜パト	パトロール合計 (延べ数)
野宿総人数 (平均) :	73	52	59	1291
医療班対応者数 (平均) :	16	19	14	344
血圧 :	3	15	2	20
診察 :	2	1	4	7
紹介状 :	1	1	2	4
薬 :	111	101	88	300

## <年越しイベント12/31>

総人数 : 120  
 医療班対応者数 : 25  
 血圧 : 2  
 診察 : 1  
 紹介状 : 1  
 薬 : 24

提供薬 (延べ数) : 風邪薬205、痛み止め20、胃腸薬106、湿布25、軟膏18、マスク60

## 連絡会シェルター保護者 : 7名

内紹介状提供5通、福祉事務所来所5名、医療機関受診1名 (糖尿病)、施設入所2名

## 福祉事務所来所者

(シェルター保護者以外) : 3名  
 入院1名 (心不全・慢性閉塞性肺疾患)、  
 医療機関受診2名 (下腿静脈炎、痔)、  
 施設入所1名

2015年1月28日

新宿連絡会医療班 大脇甲哉

# 新宿連絡会パトロール班報告

## 新宿連絡会パトロール班

越年のパトロールは12/28~1/4のうち、31日を除く七日間あてた。新宿近傍と近郊を回った。おにぎり、カイロ、情報紙を提供。車を使い適宜、毛布を届け、シェルター利用者を運んだ。医療職が同行し問診、投薬、処置を担った。

前回まで、越年は特別な行事だった。中央公園に腰を据え、臨時の日程を組んだ。今回は毎週のパトロールと、毎月の医療訪問を踏まえた。基本的に、普段の活動を反復した。

拠点型は高揚したが、「その場限り」の弊も漂った。それに比べ、日々とのつながりを感じさせる内容だった。11月半ばには、路上の仲間より「越年はどうする」の問いが飛び始めた。説明するのも期間の先取りで、連続性を強めた。

野宿の日常は、たいていの支援者に非日常で縁遠い。隣接を図るのに、資する取り組みだった。ただ落とし穴があり、悔いを残した。

男性が一人、救急搬送され、病院で亡くなった。パトロール中、二日間で三度、声をかけていた。体調不振がうかがえた。応答でき、立って動けた。経過観察を選んだ。

見覚えがなく、よそから来たばかりと思われた。ここ数年、新参ほど重病化する印象がある。その意味で、兆しがあった。

失敗はいくつか重なり、致命的となる。向こうの意思、こちらの対応、万一の想定。いずれも「また会える」の感覚で、ぎりぎりの判断を怠った。

援助の技法上、過度の習慣化を慎むべきなのが指摘されている。「ソーシャルワーク実践において仕事をルーチン化することが必要なのは明らかである。…しかしながら…ルーチン化を拡大適用しようとした時には…クライアントを軽視したり、傷つけたりする」(ニール・ソンプソン『ソーシャルワークとは何か』杉本敏夫訳)。

結局、駅の警備員が救急車を呼んだらしい。誰かわからず、行き倒れとして遇したろう。こちらはすでに名を知り、顔で見分けられるようになっていた。相手をまとまった人格と認めうる、希少な当事者だった。

現場に臨む以上、その責めから逃げ切るわけにいかない。どこまで腹をくくれるか、自問しながら新宿の街を歩きます。

### 越年パトロール記録

コース	時間	日付							平均	昨年度平均	
		12/28	29	30	1/1	2	3	4			
中央公園	南	24	17	34	20	27	28	23	54	90	
	北	36	5	20	10	17	19	31			
都庁下(雨のみ)			67								
新宿駅	東	48	26	38	47	38	50	59	71	74	
	西	27	39	20	23	21	22	39			
戸山公園		16	18	17	23	23	25	21	20	29	
駅地下		22:30~	65	60	65	50	55	50	55	57	69
延べ計			216	232	194	173	181	194	228	202	262

\*表中は当該の日、時間、コースで会った野宿者数、単位は人。

\*コースの概要は次の通り。中央公園・南=3号街路~ジャブジャブ池、北=水の広場~ポケットパーク、新宿駅・東=甲州街道~大ガード、西=4号街路~小田急。

\*中央公園、新宿駅は昨年度とコース設定が違う。平均値の比較は、なるべく同範囲となるよう調節した。

\*おにぎり提供は原則18:00~まで、日平均145人。駅地下は目測により、5人単位で把握。

パトロール班の報告で触れた件について、もう少し詳しくお伝えします。本人の役に立たない反すうで、心苦しい限りです。

### 1 経過

- ・12/28、23:00ごろ、男性と最初に会う。新宿駅西口、地下広場の隅で寝る。荷物なし、薄着。声をかけ名前を聞き、おにぎりとかイロを渡す。
- ・同、23:30、再び様子を見に行く。場所を少し動き、おにぎりをかじりかけ。横向きに寝て、ひざを抱え丸まった姿。毛布を渡す。
- ・ひどく痛がったり、出血などなし。足がはれ、全体にだるそう。救急車を呼ぶか尋ね、嫌がるそぶり。同日はここで別れる。
- ・12/29、20:00ごろ、西口地下の別の一角で再会、立って歩いている。前日と同じころ、同じあたりにおいてほしいと告げる。本人、現れず。こちらが対面したのは、これが最後。以下は、駅警備員らの話による。
- ・12/30、未明、警備員が男性に気づく。場所は前日、こちらと最後に会ったあたり。異状を感じ救急車を勧めるが、断られる。その後、何度か同じ問答を繰り返す。
- ・同、7:00ごろ、近くの交番から警官を呼び、男性を地上に移す。そこで救急へ連絡、病院へ運ばれ亡くなる。到着後、名前を伝えたほか詳細は不明。

### 2 選択肢と判断

- ・上の状況で、こちらが取れる方法として、救急要請とシェルター保護。救急車については、さほど切迫して見えず。特に29日は、難なく動いているふう。28日は、本人の同意を得にくく思われた。
- ・シェルターはより現実的で、29日の伝達はそれを念頭に置く。言葉通り会えていれば、何らかの提案を行うつもりだった。
- ・時機の点で、やや迷いを覚えた。越年に入って間がなく、シェルターの空きに余裕を持たせておきたい意識が働いた。年明けに同じ事態なら、もっと積極的にかかわったはず。ためらいが判断を鈍らせた。
- ・ほかに、本人のそばにとどまる手があった。29日は、夕方から翌朝まで活動予定。3～4時間

を共に過ごし、急場に備えることができた。これは事後の知恵で、当日は頭に浮かばず。

- ・参考までに普段の日曜日、似た場面で次の対応がありうる。救急要請、カプセルホテルやマンガ喫茶利用、路上泊、翌朝に福祉事務所で合流ないし同行。これらのいずれか、あるいは複合が通例の選択肢。

### 3 意思の疎通

- ・はじめに名乗ってから男性は言葉を発せず、問いかけへ仕草や表情で答えた。受け止め方次第で、意味づけのぶれるやり取りだった。
- ・救急車を打診し、否定的な感触を得た。反応は、手や首を振って示された。警備員へもそう。搬送を拒むのではなく、「話しかけられてもわからない」や「考えるのが面倒」を表すのかもしれない。
- ・29日は時間と場所を決め、聞き入れたかの顔つきをした。実際は新宿の地にとくとく、戸惑いをにじませたのかもしれない。不安な面持ちと、区別できるわけではなかった。
- ・あいまいな態度にもかかわらず、周りの思惑で解釈を進めた。普通に会話が成り立つか疑い、工夫するほうがよかった。真意を測るのに、筆談を試すなど。

### 4 評価と課題

- ・現場の活動に、失敗はつきもの。あまり恐れると、臆病になってしまう。今回でいえば男性に関心を払い、接触したのは間違っていない。知らぬふりで無傷を保つても、成功には程遠い。問題は、失敗をいかに軽く済ませるか。
- ・活動は無力感とも親和的。いったん福祉にかかった人が、路上に戻ってくる。越年前にも二～三、そうした例を目にした。制度とのずれに対する落胆が、働きかけを弱めさせる。展望はともかく、(自)死の危険に際しては、一時しのぎをいとわない。
- ・迷った時は合議する。今回、男性と対面したのは一～二人に限られた。多数がかかわることで、選択と判断の幅が広がる。
- ・支援者といえ、偏りと無縁でない。路上の相手を「しょせんホームレス」とみなしがち。「ホームレスこそ」の発想できめ細かく、丁寧さを重んじたい。後なる者は、先なるべし。

## 越年概数調査

	12/29~1/4 1:30~	昨年度
地下広場	118	90
4号街路	9	44
中央公園	50	90
駅東口	4	8
西口	20	44
南口	9	11
西武新宿	5	15
高田馬場	28	29
神宮外苑	14	22
江戸川橋	23	24
紅葉山	7	3
計	287	380

越年中、概数調査を何度か試みた。終電後、各地点で寝泊まりする人数を調べた。天気、平均を考え、妥当な値を採った。

4号街路、中央公園が激減。どちらも改修作業が進められ、後者はデング熱が響いた。地下広場の増は、一部が流れたせいかな。

地上の駅付近は、恒常的な減少か不明。西口や西武新宿は、教会が熱心に回る。彼らの短期宿泊を頼った層があっただろう。ほかに民間施設の勧誘、年始特有の求人も。役所の閉庁が不利益ばかりでないのが、新宿の懐の深さ。

怪しくも魅力的で、地方出にこう映る。「東京って街はすごいとこやね、駅にボーッと座ってるだけで、仕事持ちかけられる。そうやってホームレス組織してんのがおのよ」（飯島裕子、ビッグイシュー基金『ルポ若者ホームレス』）。

この種の吸引は昔、寄せ場が果たしていた。40年前、日雇いの実感は今と通じる。是非論より、当座の工面を。「ワシら現に手配師がおるから仕事に行つとるんや、ただ手配師追放いうたかて、そのあとどないしてくれるつもりなんや」（寺島珠雄編『釜ヶ崎語彙集』）。

今後、100人単位で泊まれる場合は、都心にほぼなくなるだろう。街には、別口の機会や（消極を含めた）寛容さがある。空間を占めるのと違い、さほど目立たず、容易に排せない。

路上の問題は〈可視化〉の文脈で語られることが多い。あえて「見えない街の可能性」に賭けるのは、無謀すぎるだろうか。

## 新宿連絡会 会計報告

2014年度11-1月期

今期も多くのご支援を頂き、ありがとうございます。

頂いたお金は連絡会の運営費や仲間のために全て使い切っております。現在累積赤字中となっておりますが、必要性のある活動が続きますので、今後ともご支援宜しくお願い致します。

### 2014年度 11-1月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
<b>I 計上収入の部</b>		通信費	18,050
1 寄付金収入	975,705	消耗品費	11,285
<b>計上収入合計</b>	<b>975,705</b>	事務用品費	1,458
		衛生管理費	5,228
		支払手数料	8,620
<b>II 計上支出の部</b>		車両費	4,498
<b>1 事業費</b>			
弁当/おにぎり事業	163,152	計上支出合計	751,070
越年越冬事業	517,736	計上収支差額	224,635
その他活動事業	3,543	前期収支差額	△842,555
<b>2 管理費</b>		次期繰越金	△617,920
旅費交通費	17,500		

## ●活動カンパ

振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

## ●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会宛てでお願いします。